

〔原著〕

特別養護老人ホームの入所者のその人らしい生活を支える看護実践の課題の明確化

堀田 将士

Clarifying the Issues in the Nursing Practice to Support the Individual Lives of Residents in Nursing Homes

Masashi Hotta

要旨

特別養護老人ホーム（以下、特養）の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の課題を明らかにし、課題解決に向けた方向性を検討すること、また、特養の入所者のその人らしい生活を支える看護の示唆を得ることを本研究の目的とした。

A 特養の看護職や入所者とその家族、他施設の看護職への面接調査や、A 特養の他職種への質問紙調査から入所者のその人らしい生活を支える看護実践の現状等を把握し、その結果を A 特養の施設長と看護職と共有、検討し課題を明らかにした。

A 特養の看護職は「入所者中心の援助を行うことが難しい現状」、「看護職間でのコミュニケーションの難しさ」、「入所者への関わりについて深く振り返る機会がないこと」等を感じていた。また、他職種の入所者への支援や看護職に対する思い、入所者とその家族の施設における生活やスタッフに対する思い、他施設の看護職の看護実践の現状と課題、課題に向けた取り組みを把握した。これらの結果を共有し、「看護職として関わる場面を活かせず、入所者と十分な話をすることや入所者の言葉を待ち関わることでできていないため、入所者の話を傾聴する必要がある」、「看護職は入所者に関わることが難しい家族への援助をできるように関わる必要がある」、「看護職間で十分に話し合い看護職の役割の再確認や看護実践について共通認識する必要がある」、「介護職との協働に向けた関わりが必要である」、「ターミナル期にある入所者の状態に合わせた援助を行うことが必要である」等、10 の課題を明らかにした。

特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の課題解決の方向性は、入所者への日々の関わり中で思いを捉える声掛けを意識すること、入所者の思いなどを家族が理解できる支援の実施、日々の実践の場を活用した学習機会や振り返りの機会の設定、介護職が理解できるような説明の実施などが考えられた。

キーワード：特別養護老人ホーム、その人らしい生活、看護実践、連携

I. はじめに

わが国の 65 歳以上の高齢者の人口は、2020 年 10 月 1 日現在、3619 万人となり、高齢化率は 28.8%（厚生労働統計協会，2021，p50）であり、2020 年の要介護認定者数は 669 万人と報告され、介護保険制度が始まった 2000 年よりも 3 倍以上となっている（厚生労働統計協会，2021，p250）。また、特別養護老人ホーム（以下、特養とする）は増加しており、2020 年 9 月の特養の利用率は 96% であ

った（厚生労働省政策統括官，2022）。さらに、2016 年 9 月の特養の退所理由は「死亡」が 67.5% と最も多かった（厚生労働省政策統括官，2018）。

特養の入所者は、特養を終の棲家として生活することが多いが、自宅とは異なる生活環境の中で一緒に過ごしてきた家族以外の人々と過ごし、慣れない環境の中で生活することになる。このような環境の中で特養の入所者が人生の最期を生きるには、看護師・准看護師（以下、看護職とす

る)や介護職などのスタッフが捉えたその人の姿、価値観、性格など個々人によって個性のある人物像である「その人らしさ」を基にしたその人らしい生活が尊重されることが大切であり、その人らしい生活を捉え関わることが重要であると考えます。

その人らしさについて、Kitwood (1997/2017) は「関係や社会的存在の文脈の中で、他人からひとりの人間に与えられる立場や地位である。それは人間として認めること、尊重、信頼を意味している」としている。また、黒田ら(2017)は、その人らしさの定義を「内在化された個人の根幹となる性質で、他とは違う個人の独自性をもち、終始一貫している個人本来の姿、他者が認識する人物像であり、人間の尊厳が守られた状態という特性を示す」としている。その人らしさは、他者が認識する「その人」であるため、他者がどのように「その人」を捉えているかが重要であるが、特養の看護職の少なさや要介護度が上がることで医療的支援や介助量が増え、看護職がじっくり話をすることや日常生活への介入を行えず、入所者のその人らしさを捉えることを難しくすると考える。

本研究の対象施設のA特養の施設長や看護職は、食生活や清潔習慣、趣味など入所者が過ごしてきた在宅での生活習慣の継続や、人生の最期の迎え方を考えて施設でできることを大切にしたいなど、入所者が最期までその人らしく生活することを大切にしたいと考えていた。しかし、看護職は、要介護度が高く様々な健康状態の入所者を受け入れることから医療的な支援に時間を費やす必要があり、入所者の爪が伸びていても切ることができないことや、入所者の『話をしたい』という思いに対応できないなど、各入所者に十分関わっていないことや入所者の理解に難しさを感じているようであった。そのため、A特養の看護職の看護実践の現状を捉え、その人らしく生活することを支える看護について検討する必要があると考えた。

そこで、A特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の課題を明らかにし、課題解決に向けた方向性を検討すること、また、特養の入所者のその人らしい生活を支える看護の示唆を得ることを本研究の目的とした。本研究の取り組みにより、特養の入所者が望む生活の実現や最期までその人らしく生活するための看護実践を実現し、施設全体のケアの質の向上に繋がると考えた。

なお、筆者の研究の全体は「A特養の入所者のその人ら

しい生活を支える看護実践の課題の明確化」、「A特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践に向けた取り組み方針の考案と実施」、「A特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の取り組みの評価」の3つで構成されているが、そのうち最初のものが本研究である。また、筆者は、研修生としてA特養での研究に取り組んだ。

II. 研究方法

本研究では、まずA特養の看護職を対象にA特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の現状把握の調査を実施し、さらに、A特養の看護職以外の職種や他施設の看護職、A特養の入所者とその家族を対象として、A特養の施設長や看護職と課題を検討する際に使用する資料とする調査を実施し、その結果を用いてA特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の課題を検討した。

1. 研究対象施設の概要

A特養は60床、地域密着型特養16床、ショートステイ20床が併設されており、本研究ではショートステイを除いた76床を対象とした。研究開始時は看護職8名(看護師1名、准看護師7名)、介護職41名、生活相談員3名、管理栄養士1名、介護支援専門員2名(兼務)が所属していた。

2. A特養の看護職の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の現状の把握

対象はA特養の同意の得られた看護職であり、2019年9月に半構造化面接を実施した。主な調査内容は「A特養の入所者への看護実践の中で入所者のその人らしい生活を支えることができたと感じた経験や難しさを感じた経験について」、「その人らしい生活とは何かについて」とした。許可を得て録音し、逐語録を作成した。作成した逐語録を熟読し、看護職が捉えているその人らしい生活と、看護職の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の現状について抽出し、意味内容が損なわれないように要約し、類似性に沿って整理して分類した。

3. A特養の他職種の入所者への思い、看護職に対する思いの把握

対象はA特養の同意の得られた介護職、生活相談員・管理栄養士・介護支援専門員(以下、その他スタッフとする)、施設長、嘱託医とし、2019年9月に質問紙調査を実施した。質問項目は、①職種、②-1「入所者に対する生活の

支援において大切にしていること」、②-2「入所者が望んだり希望している生活、その人らしい生活を支えるために日々取り組んでいることや心がけていること」、②-3「入所者や家族の望む生活や希望している生活、その人らしい生活を支える上で看護職に求める役割や機能、期待することなど」とした。質問項目①は単純集計を行い、質問項目②-1～3は、各項目で得られた回答の意味を損なわないように要約し、類似性に沿って分類した。

4. 入所者とその家族のA特養における生活や施設スタッフが実施する援助に対する思いの把握

対象はA特養の同意の得られた入所者とその家族とし、2019年9月に半構造化面接を実施した。入所者は施設長と相談し意思疎通が可能な方を選定した。主な調査内容は、「現在の生活状況、施設での生活の慣れ」から生活への思いや、「施設の職員への声のかけやすさ、話を聞いてくれるか」、「望んでいる生活の確認や実現に向けた関わりがあるか」などから施設スタッフの援助に対する思い、「施設のスタッフに望むこと、改善点」などの要望等を把握した。許可を得て録音し、その後逐語録を作成した。作成した逐語録を熟読して意味内容が損なわれないように要約し、類似性に沿って整理した。なお、入所者及び家族には様々な職種が生活支援に関わることもあり、各職種を分けて回答することに難しさがあると判断し、調査内容は施設スタッフの援助として問いかけた。

5. 他施設における看護職のその人らしい生活を支える看護実践の現状の把握

施設でその人らしい生活を支える看護実践を先駆的もしくは積極的に実施している施設の同意の得られたB特養とC特養の看護職を対象とした半構造化面接を2019年9月～10月に実施した。調査内容は、他施設の看護職が考えるその人らしい生活やその人らしい生活を実現するための看護実践と課題、課題に対する取り組みに関連する内容とした。許可を得て録音し、逐語録を作成したものをデータとした。作成した逐語録を熟読し、他施設看護職が考えるその人らしい生活、その人らしい生活を実現するための看護実践、その人らしい生活を支える看護実践の課題と課題に対する取り組みを抽出し、意味内容が損なわれないように要約し、類似性に沿って分類した。

6. A特養の入所者のその人らしさを支える看護実践の課題の明確化

対象は、A特養の同意の得られた看護職、施設長とし、2020年3月～7月に研究方法の2～5の結果をまず施設長と共有し課題を検討した。施設長と話し合った課題と研究方法2～5の結果を看護職と共有し課題を検討した。課題を検討する際には、看護職が日々の実践を振り返ることができるように問いかけた。検討の内容は許可を得て録音し、逐語録を作成した。逐語録を熟読し、A特養の看護実践の課題に関する内容を抽出し、意味内容が損なわれないように要約し、類似性に沿って分類した。第3回以降に検討し分類した内容は、第1、2回の施設長と検討し分類した課題と照合しながら、課題を明確化した。

7. 倫理的配慮

A特養の理事長と施設長、B特養とC特養の施設長に本研究の目的、方法、倫理的配慮などを口頭と文書で説明し書面にて承諾を得た。また、研究協力者である看護職、介護職、その他スタッフ、施設長、嘱託医、入所者やその家族に対して本研究の目的、方法、倫理的配慮など口頭と文書で説明し書面にて同意を得た。

本研究は、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文倫理審査部会の承認を得て実施した（承認年月：2019年5月【通知番号20219-A002D-2】、2020年10月【通知番号2020-A003D-2】）。

Ⅲ. 結果

1. A特養における入所者のその人らしい生活を支える看護実践の現状

1) 研究対象概要

研究に同意の得られたのは経験年数が15年以上の看護職2名であり、A特養での経験年数は1年未満1名、1年以上が1名であった。看護職に実施した面接時間は一人当たり44分～45分であった。

2) A特養の看護職が考えるその人らしい生活とその人らしい生活を支える看護実践の現状

A特養の看護職が考えるその人らしい生活とその人らしい生活を支える看護実践の現状に関する意見として28の要約が抽出され、看護職が捉えているその人らしい生活は1分類（本文では《 》で示す）、その人らしい生活を支える看護実践の現状は16小分類から9大分類に整理された。

本文では小分類を『 』、大分類を【 】で示す。

A 特養の看護職が考えるその人らしい生活については、《その人のペースで生活することや、自宅のような空間がその人らしい部屋と考えるが、施設でその生活を送ることが難しいこともありその人らしい生活とは何か考えている》であった。

また、A 特養の看護職の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の現状として、『自身の家族への介護ですら介護者中心の生活となっていると感じており、入所者のその人らしい生活というところまでは考えられない』といった【入所者のその人らしい生活というところまで捉えることができていない】や『施設の看護職としての役割を果たすことで精一杯であり、その人らしい生活を送るために関わっていないと感じている』といった【その人らしい生活を支援している実感がなく状況】から、その人らしい生活を捉えられないことやその人らしい生活を支援している実感がなく現状があった。また、『施設における集団生活や職員の人員不足によって入所者一人一人に合った生活を送ることが難しい』、『日々の業務や援助を実施しないといけない』という思いから入所者は援助者の都合によって生活せざるをえない状況となっている』といった【入所者中心の援助を行うことが難しい現状】、『入所者の施設での生活の思いや生きがいや状態を把握しているが、それを援助に結び付けることが難しい』、『入所者の思いは把握できており、共有もできているが生活に活かすところまで関わる事ができていない』といった【入所者の施設での生活に対する思い等を援助に繋げることが難しい現状】、『介護職とのコミュニケーションは取れるが、生活援助について伝えたいことがあっても言い辛いこともある』、『介護職に入所者本位ということを伝えていきたいが、伝えることができない難しさがある』、『施設における生活への援助が分からない時がある』、『施設の行事では入所者の参加の有無を判断するだけである』といった【生活援助に介入することへの難しさ】といった援助に関する難しさがあった。さらに、『入所者と家族の両者の思いが分かるためどのように判断すべきか常に考えているが、看護職間のカンファレンスでは意見を伝えられないことがある』といった【看護職間でのコミュニケーションの難しさ】や『スタッフ間で方法論は共有しているが、自分たちの行動について深く振り返る機会はない』といった【入所者への関わりについて深く振り返

る機会がないこと】が挙げられた。『入所者の最期の迎え方についてもっと積極的に伝えていきたいがその機会が少ない』、『入所者の最期の迎え方についてスタッフや家族と話し合いみんなで送り出したいと思っている』、『エンゼルケアの必要性や日々の整容の大切さを伝えたり、看取りにはみんなで関わり、特養で看取られてよかったと思ってもらえるようにしたいがそこまで到達することが難しい』といった【看護職や他職種、家族の皆で看取りの援助を充実させたいという思い】や、情報共有について『入所者の思い等、気がついたことや思ったことは共有することになっている』といった【情報共有する仕組みを活用することになっていること】が挙げられた。

2. A 特養の他職種の入所者への思い、看護職に対する思い

1) 研究対象概要

研究に同意の得られた A 特養の介護職 21 名、その他スタッフ（生活相談員 3 名、管理栄養士 1 名）、施設長、嘱託医 3 名の合計 29 名を対象とした。回収数は 21 名（回収率は 72.4%）であった。

2) 入所者の生活支援において大切にしていること

介護職、その他スタッフ、施設長、嘱託医が入所者の生活支援において大切にしていることとして 29 の要約が抽出され、13 小分類から 10 大分類に整理された。大分類は、【自分らしく生活してもらうこと】、【その人らしく生活してもらうこと】、【これまで過ごしてきた生活を施設でも送ってもらうこと】、【安心・安楽な生活をしてもらうこと】、【笑顔で生活してもらうこと】、【元気に生活してもらうこと】、【入所者の思いを把握し希望に沿った支援をすること】、【入所者の残存機能や能力を活かして生活できるように支援すること】、【施設にあった医療を提供すること】、【施設におけるその人らしい生活の実現の難しさ】であった。

3) その人らしい生活を支えるために日々取り組んでいること

介護職、その他スタッフ、施設長、嘱託医がその人らしい生活を支えるために日々取り組んでいることとして 27 の要約が抽出され、18 小分類から 11 大分類に整理された。大分類は、【入所者の思いや希望の実現に向けた関わり】、【入所者の思いを捉える関わり】、【入所者に敬意をこめた関わり】、【入所者の生活環境やペースに合わせた関わり】、【残存機能が維持できる関わり】、【安心・安全な生活の実

現に向けた関わり】、【他職種間の連携】、【施設の生活にあった薬剤の選択】、【入所者の立場に立った判断】、【挨拶や声をかけること】、【ケアプランの実践】であった。

4) その人らしい生活を支える上で看護職に求める役割や機能、期待すること

介護職、その他スタッフ、施設長、嘱託医がその人らしい生活を支える上で看護職に求める役割や機能、期待することとして29の要約が抽出され、20小分類から9大分類に整理された。大分類は、【他職種との連携・協働】、【入所者の健康管理や医療処置の実施】、【入所者が安心できる説明の実施】、【入所者へ迅速な対応をすること】、【看取りへの支援】、【入所者とその家族の思いの傾聴】、【スタッフの多様な価値観を認め方向性を模索すること】、【看護職の考えを表出すること】、【看護職の強みを明確にすること】であった。

3. 入所者とその家族のA特養における生活や施設スタッフが実施する援助に対する思い

1) 研究対象概要

研究に同意の得られた3名のA特養の入所者と3名の家

族を対象とし、面接調査を実施した。研究対象の概要を表1、表2に示す。

2) 入所者の施設の生活に対する思い

入所者の施設の生活に対する思いとして9の要約が抽出され、8小分類から5大分類に分けられた(表3)。

3) 入所者の施設のスタッフの援助に対する思い

入所者の施設のスタッフの援助に対する思いとして13の要約が抽出され、10小分類から6大分類に整理された。大分類は、【身体状況に合わせて生活を支援してくれる】、【施設のスタッフの親切な対応や生活に対するありがたさを感じている】、【スタッフにお世話になっているという思いがあり、自分の思いは伝えられない】、【生活における希望に対応してもらえないため諦めることもある】、【自分のことを悪く言われてつらい思いをしている】、【医師が話をしてくれるのはうれしい】であった。

4) 入所者のスタッフに対する望みや求めること、改善してほしいこと

入所者のスタッフに対する望みや求めること、改善してほしいこととして4の要約が抽出され、2分類に整理にさ

表1 入所者概要

	A氏	B氏	C氏
年齢	90代	80代	90代
A特養の入所期間	約5カ月	約1年4カ月	約3カ月
介護度	4	3	2
疾患など	心不全、心原性脳梗塞、心房細動、急性硬膜下血腫、両膝変形性膝関節症、高血圧	リウマチ、頸椎症、低カリウム血症、低血圧、腸炎、右眼視野不良	認知症、心不全、甲状腺機能低下症、糖尿病、右坐骨・恥骨骨折
キーパーソン	長男	孫	三女
面接時間	48分	48分	16分

表2 家族概要

	家族A氏	家族B氏	家族C氏
年齢	70代	30代	60代
入所者との関係	長男	孫	長男の妻
面接時間	36分	37分	28分
備考	A氏の家族	B氏の家族	A・B・C氏以外の入所者の家族

表3 A特養の入所者の施設の生活に対する思い

大分類	小分類
施設での生活には慣れたが、入所時はショックがあり自宅に帰りたい気持ちがあった	施設での生活には慣れたが入所時はショックであり、家に帰りたいという気持ちであった
施設では入所者と話をする機会がない	施設での生活には慣れたが、部屋で過ごすことが多く、入所者と話をしたいと思ってもその機会がない 施設では話をするので入所者がおらず、コミュニケーションをとりたいたいと思っても難しい
施設では今までしてきたことができないため寂しい	施設では今まで行ってきたことができていないため寂しい思いがある
施設での生活を楽しんだり、自分のことは自分で行い生活している	施設での生活を楽しく過ごしている 自分のことが自分で出来ることへのありがたさを感じている 認知症にならないように自分でできることは行っている
施設での生活には慣れスタッフは生活を手伝ってくれる	生活には慣れてきており、一人では危ないことには手伝ってくれる

れ、【施設に求めることや期待することは特でない】、【自宅に帰りたいという思いがある】であった。

5) 入所者の家族の入所者の施設における生活に対する思い

入所者の家族の入所者の施設における生活に対する思いとして23の要約が抽出され、13小分類から8大分類に整理された。大分類は、【施設でもこれまでの生活をしてほしいという思いがある】、【家族として施設の生活に対する安心感や入所者の満足感があると思っている】、【家族として入所者に関わることの難しさを感じている】、【家族として施設で生活してもらおう方が良いという思いを持っている】、【入所者本人や家族が施設での生活に適応しないといけないという思いがある】、【施設での生活に適応していると感じる】、【スタッフへの態度に心配している】、【入所者の身体的精神的変化を感じている】であった。

6) 入所者の家族のスタッフの援助に対する思い

入所者の家族のスタッフの援助に対する思いとして6の要約が抽出され、4分類に整理され、【入所者の思いが実現できるような関わりをしてもらっている】、【家族が入所者の生活が分かるように対応している】、【入所者の生活が向上するように関わってもらっている】、【入所者の生活は施設に任せるしかないと感じている】であった。

7) 入所者の家族のスタッフに対する望みや求めること、改善してほしいこと

入所者の家族のスタッフに対する望みや求めること、改善してほしいこととして7の要約が抽出され、3小分類から2大分類に整理された。大分類は、【スタッフへの対応に満足しているため望むことはない】、【スタッフの対応を改善してほしいという思いがある】であった。

4. 他施設における看護職のその人らしい生活を支える看護実践の現状の把握

1) 研究対象概要

研究に同意の得られたB特養看護職1名、C特養看護職

1名の2名を対象とし、面接調査を実施した。研究対象の概要を表4に示す。

2) 他施設看護職が考えるその人らしい生活

他施設看護職が考えるその人らしい生活について2の要約が抽出され、《その人らしいというのは、入所者が選択できるような生活を送ることである》、《入所者が良い表情をしているその瞬間が、その人らしさを発揮している時である》と分類名を付けた。

3) 他施設の看護職におけるその人らしい生活を実現するための看護実践

他施設看護職が考えるその人らしい生活を実現するための看護実践として10の要約が抽出され、【入所者の苦痛に対応できるように観察する】、【入所者の思いを叶えることができるように関わる】、【その時々を大切に生活してもらおうことを意識し、看護職の存在意義を考えて関わる】、【介護職と協働することができる関係性を構築する】、【看護職間で時間をかけて話し合う機会がない現状がある】、【入所者の情報収集をスタッフや本人、家族への積極的な関わりから行っている】の6分類に整理された。

4) 他施設のその人らしい生活を支える看護実践上の課題と取り組み

他施設のその人らしい生活を支える看護実践上の課題として8の要約が抽出され、【入所者の思いに応える関わりが出来ていない】、【入所者の立場に立って考えることが難しい】、【職場の風土を変えることが難しい】、【認知症ケアの成功体験を実感できると良い】、【介護職のステップアップの支援を進めることができない現状がある】の5分類に整理された。

また、課題に対する取り組みとして5の要約が抽出され、【スタッフ相互で話し合いを実施し、スタッフと共に対応する】、【自施設での取り組みが認められ自信が持てるように支援する】、【スタッフの意欲が高まるように過去事例を

表4 他施設看護職概要

	B 特養看護師	C 特養看護師
年齢	50代	40代
職種	看護師 (施設長であり看護職の責任者)	看護師
看護職の経験年数(年)	約10年	約19年
現在の施設の経験年数(年)	約4年	約5年
現在所属する特養以外での経験施設	病院やクリニックなどの医療機関、介護系の施設	病院、有料老人ホームや特養などの施設
資格	介護支援専門員	認知症認定看護師
面接時間	53分	77分

振り返ることができるように取り組む】、【介護職の専門性を活かした援助ができるように支援する】の4分類に整理された。

5. A特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の課題の明確化

1) 研究対象概要

同意の得られたA特養の看護職2名と施設長と個別に検討を実施した。看護職は経験年数が15年以上の2名であった。施設長は、A特養の開設当初より看護職として勤務し、施設長になるまでは看護職の責任者の立場でもあった。

2) A特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の課題の検討

(1) 施設長と看護職との検討会の概要

施設長と看護職と筆者でA特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の課題について検討した。検討会の概要を表5に示す。

(2) 検討会の内容

まず、施設長とその人らしい生活を支える看護実践の課題を検討し、その後に看護職と検討することとした。第1回、第2回に施設長と検討した内容からA特養のその人らしい生活を支える看護実践の課題として、44の要約が抽出され、32小分類から11大分類に整理できた(表6)。

第3回、第4回の看護職との検討会では、結果1～4の

内容と施設長と検討した11の課題を共有し、A特養の看護実践の課題の内容を検討した。看護職と検討した看護実践の課題に関して23の要約が抽出され、16分類(本文では【 】で示す)に整理された。看護職の意見は、【入所者の生活背景に合わせて対応できる看護職にコミュニケーションを依頼している】、【話しやすい入所者に会話が偏っている現状がある】、【入所者と時間をかけて話すことができていない】、【看護職の思いを他の看護職に伝えることができるようになってきている】、【看護職間の話し合いを充実させる必要がある】、【特養の看護職の役割を理解する必要がある】、【看護職をまとめる必要がある】、【介護職が援助を取り入れたり継続することが難しい】、【介護職と連携するために話し合うようにしている】、【介護職と話し合う余裕がない現状がある】、【入所者の援助に自信がなく生活を支えているという実感はない】、【看護実践を振り返ることができていない現状がある】、【時間に余裕があっても援助につながらずとは限らない】、【家族の希望を確認できていない現状がある】、【入所者が家族と関われる時間を提供できると良い】、【看取り期の入所者への関わりができていなかったり心配なことがある】に整理された。

看護職と検討した内容を基にA特養のその人らしい生活を支える看護実践の課題の一部を筆者が修正した(「」は修正前の課題を示し、< >は修正後の課題を示す)。修正

表5 A特養のその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題を考える検討会の概要

検討回数	日時	対象者	検討内容	検討時間
検討会 1回目	2020年 3月	施設長	①A特養の看護職の面接調査結果、A特養の看護職以外の施設スタッフ・施設長・嘱託医への質問紙調査結果の共有 ②共有した内容から「その人らしい生活を支える看護実践の現状と課題」の検討	60分
検討会 2回目	2020年 3月	施設長	①A特養の入所者とその家族への面接調査結果の共有 ②第1回目に検討したその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題を整理した内容の報告。また、報告した内容と①で共有した内容を踏まえた「その人らしい生活を支える看護実践の現状と課題」の検討	89分
検討会 3回目	2020年 6月	B看護職、 C看護職	①看護職2名に個別にA特養の看護職の面接調査結果、A特養の看護職以外の施設スタッフ・施設長・嘱託医への質問紙調査結果、A特養の入所者とその家族への面接調査結果の説明の実施 ②施設長と検討したその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題を整理した内容の報告	B看護職： 30分、 C看護職： 30分
検討会 4回目	2020年 6月	B看護職、 C看護職	①看護職2名と個別に第3回目に共有した内容を基に「その人らしい生活を支える看護実践の現状と課題」の検討	B看護職： 26分、 C看護職： 31分
検討会 5回目	2020年 7月	B看護職、 C看護職	①第4回に検討した内容から修正したその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題の内容の共有とその内容の検討 ②他施設の看護職の面接調査結果の共有とその内容を踏まえたその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題の検討	B看護職： 19分、 C看護職： 27分
検討会 6回目	2020年 7月	施設長	①他施設の看護職の面接調査結果の共有 ②看護職と検討した内容の共有。共有した内容と①で共有した内容を踏まえた「その人らしい生活を支える看護実践の現状と課題」の検討	68分

表6 施設長と検討したA特養のその人らしい生活を支える看護実践の課題

大分類	小分類（一部抜粋）
看護職として関わる場面を活かせず、入所者と十分な話をすることや入所者の言葉を待ち関わることでできていないため、入所者の話を傾聴する必要がある	看護職の関わり場面を生かせず、入所者の話をすることや入所者の言葉を待つことができていない 入所者の発言を待ち関わることや、十分に思いを聞くことができていない現状がある 入所者に介入して会話をし関わりを促すといけいない
入所者に関わる姿勢を見直す必要がある	入所者への関わる姿勢を見直す必要がある
看護職や介護職、その他スタッフは関わる際の意図を入所者に伝える必要がある	スタッフが関わっている意図が入所者には伝わっていない現状がある
看護職は入所者に関わるのが難しい家族へ援助できるように関わる必要がある	家族の状況によって家族は入所者の施設での生活にかかわることが難しい現状がある
看護職間で十分に話し合い、どのように看護実践するかを共通認識していく必要がある	看護職間で十分に話し合えていない現状があり、看護職がまとまらなかったり、施設の方針も理解できていないかもしれない 各看護職の思いを理解し意見を取り入れることが必要である 看護職間で十分に意見交換を行う必要がある
看護職間でその人らしい生活とその生活を支える援助について話し合う必要がある	入所者のその人らしい生活やその生活を支える援助を考える必要があり、話し合う必要がある
看護職が実践している援助が看取りやその人らしい生活を支えているという実感でできることが必要である	看護職が実施している援助が看取りやその人らしい生活を支えているということにつながっているということが実感できていない 看取りは話し合いを行い実施しているが、記録として残っていないことで看取りの援助を行ったという実感がでない
入所者の思いに寄り添い援助する必要がある	入所者の思いに寄り添った生活をしてもらえるような援助を行うことが難しい
入所者の思いを把握することはでき多職種間で共有することはできるが入所者の思いを援助に繋げることができていない	多職種間で入所者の思いを共有することはできているが援助までつなげることができていない 他職種と連携できていない現状がある
介護職と協働して入所者の生活を支援するために、介護職に関わる必要がある	介護職の援助や援助に対する不安について説明できていない現状がある 介護職に説明できるほどの自信がない可能性がある 入所者の思いや身体状況に合わせて介助できるように介護職に助言する必要がある
ターミナル期にある入所者の状態に合わせた援助を行うことが必要である	ターミナル期にある入所者の状態に合わせた援助が難しい現状がある

①看護職として関わる場面を活かせず、入所者と十分な話をすることや入所者の言葉を待ち関わることでできていないため、入所者の話を傾聴する必要がある
②入所者に関わる姿勢を見直す必要がある
③看護職や介護職、その他スタッフは関わる際の意図を入所者に伝える必要がある
④看護職は入所者に関わるのが難しい家族へ援助できるように関わる必要がある
⑤看護職間で十分に話し合い看護職の役割の再確認や看護実践について共通認識する必要がある
⑥看護職間でその人らしい生活とその生活を支える援助について話し合う必要がある
⑦多職種で共有した入所者の思いを援助に繋げることが必要である
⑧看護職が実践している援助が看取りやその人らしい生活を支えることに繋がっているという実感でできることが必要である
⑨介護職との協働に向けた関わりが必要である
⑩ターミナル期にある入所者の状態に合わせた援助を行うことが必要である

図1 看護職と検討し修正したA特養の入所者のその人らしい生活を支える看護実践の現状と課題（下線は修正箇所）

したA特養のその人らしい生活を支える看護実践の課題は4つであった。「看護職間で十分に話し合い、どのように看護実践するかを共通認識していく必要がある」については、特養の看護職の役割も共通認識することを追加し、＜看護職間で十分に話し合い看護職の役割の再確認や看護実践について共通認識する必要がある＞と修正した。「介護職と協働して入所者の生活を支援するために、介護職に関わる必要がある」については、介護職を支援することが必要であると考え、＜介護職との協働に向けた関わりが必

要である＞と修正した。「入所者の思いを把握することはでき多職種間で共有することはできるが入所者の思いを援助に繋げることができていない」については、「入所者の思いに寄り添った生活を援助することが難しい」の課題を統合し、＜多職種で共有した入所者の思いを援助に繋げることが必要である＞と表現を修正した（図1）。

第5回検討会の看護職の意見から、A特養のその人らしい生活を支える看護実践の課題に関する内容として10の要約が抽出され、6分類（本文では【 】で示す）に整理

された。【看護職間の話し合う機会が十分でない現状がある】、【学習を進めることが難しい現状がある】、【看護職間の相談体制があるが個々で判断して対応してしまう現状がある】といった看護職間で十分に話し合い看護職の役割の再確認や看護実践について共通認識する必要がある>に関連した内容や、【介護職が援助を取り入れたり継続することが難しい現状がある】、【介護職が対応できるように理由とともに説明する必要がある】、【介護職が適切に対応できるように支援する必要がある】といった介護職との協働に向けた関わりが必要である>に関連した内容であった。

第6回検討会の施設長の意見から、A特養のその人らしい生活を支える看護実践の課題に関する内容として20の要約を抽出し、12分類（本文では【 】で示す）に整理された。【入所者と意思疎通を図ることに難しさがある】、【病院とは異なる施設に合った看護について考えることが必要である】、【施設の看護職の役割を理解し援助を行う必要がある】、【処置が必要となった要因を検討する必要がある】、【現場の現状を理解した上で看護職に伝達することができる】、【医師と協働する姿勢が必要である】といった看護職間で十分に話し合い看護職の役割の再確認や看護実践について共通認識する必要がある>に関連した内容や、【介護職と一緒に支援するという姿勢をもち、介護職を支援するように関わる必要がある】、【介護職に看護職の役割を任せすぎている現状がある】、【入所者の状態をアセスメントできておらず、援助が継続されていない現状があるため、状態に合わせた援助になるように見直す必要がある】といった介護職との協働に向けた関わりが必要である>に関連した内容であった。また、【入所者のその人らしさが出ている行動の意味について考える必要がある】は、<看護職間でその人らしい生活とその生活を支える援助について話し合う必要がある>に関連した内容であった。【入所者中心となるように考える必要がある】、【スタッフの対応によって入所者の生活が変わってしまう現状がある】といった入所者に関わる姿勢を見直す必要がある>に関連した内容であった。

第5回、第6回の検討後の内容は、A特養のその人らしい生活を支える看護実践の課題に挙げられた10の内容に関連した意見であり、新たな課題になるとは考えられず、10の課題に網羅されていると筆者は考えたため、検討会4

回目に修正した内容を課題とした。

IV. 考察

A特養では、入所者や家族の思いに沿った関わり、看護職間の共通認識や援助の実感、また介護職への支援やターミナル期の援助に関連する課題が挙がり、これらの課題の解決に向けて、日々多忙で人数が少ない看護職に限られた時間の中で、工夫して取り組む必要があると考える。そこで、どのように入所者と家族の思いを把握し関わるか、どのように看護実践の共通認識や振り返りを行うか、どのように介護職と協働するための支援を充実させるか、どのようにターミナル期の入所者の援助を充実させるかの4つの視点から課題解決の方向性について考察する。

1. 入所者と家族の思いの把握と関わり方

介護保険施設の看護職の業務実態を加藤ら（2006）は、「健康状態の観察、医療処置、薬の分包・与薬等の診療補助業務と記録、申し送り・カンファレンスが9割を占めていた」と述べており、医療に関連した業務に追われていることが分かる。A特養では【入所者中心の援助を行うことが難しい現状】や【入所者と時間をかけて話すことができていない】などの現状から、入所者の生活への思いなどの確認や、入所者が理解できる説明を十分にできていないと考えられた。そのため、<課題① 看護職として関わる場面を活かせず、入所者と十分な話をする必要や入所者の言葉を待ち関わるできないため、入所者の話を傾聴する必要がある>、<課題② 入所者に関わる姿勢を見直す必要がある>、<課題③ 看護職や介護職、その他スタッフは関わる際の意図を入所者に伝える必要がある>では、看護職の関わる時間を増やすことが難しいことを踏まえて、検温など日々関わる時間の中で体調だけではなく思いを捉える声掛けを意識するなどの工夫が必要であると考えられる。

また、A特養の看護職は、【家族の希望を確認できていない現状がある】や【入所者が家族と関われる時間を提供できると良い】という思いがあった。<課題④ 看護職は入所者に関わるのが難しい家族へ援助できるように関わる必要がある>では、看護職が主に健康管理をしている疾患や障害などの身体機能の変化、それらを踏まえた生活の変化や入所者の思いを家族が理解できるように関わり、家族と意思疎通を図る必要がある。また、寺尾ら（2014）は、

「ケア提供者が家族と共に高齢者にケアを行うことは、家族に高齢者と最後まで関わった、という実感と心の安寧をもたらすと考える」と述べており、家族が入所者との関係の継続や入所者の代弁者として思いを伝えられる支援が必要であると考えます。

2. 看護実践の共通認識や振り返りの方法

A 特養の看護職は【看護職間でのコミュニケーションの難しさ】や【看護職間の話し合う機会が十分でない現状がある】などを感じていることが明らかになった。さらに、課題検討で【特養の看護職の役割を理解する必要がある】や【病院とは異なる施設に合った看護について考えることが必要である】などが挙がり、特養の特徴に応じた援助が必要であると考えた。＜課題⑤ 看護職間で十分に話し合い看護職の役割の再確認や看護実践について共通認識する必要がある＞や＜課題⑥ 看護職間でその人らしい生活とその生活を支える援助について話し合う必要がある＞、＜課題⑦ 多職種で共有した入所者の思いを援助に繋げることが必要である＞では、特養の看護職の役割や看護実践への思い、多職種で共有した情報を活かした援助などについて話し合う機会や学習機会を設け、看護職間で共通認識することが必要である。しかし、【学習を進めることが難しい現状がある】ことや「特養の看護職は配置人数が少ないため、看護職独自での勉強会の実施や施設外研修への参加が困難になっている可能性がある（堀田ら，2016）」ことから、少人数の看護職が学習や個別事例の検討に時間をかけることは難しい。そのため、日々の実践の場を活用した学習など、学習方法や環境を整えることも重要であると考えます。

また、【その人らしい生活を支援している実感がなく状況】や課題検討でも【看護実践を振り返ることができていない現状がある】ということや、他施設の看護実践の課題では【認知症ケアの成功体験を実感できると良い】ということからも、看護実践の振り返りができていないことや支援の実感のなさが明らかとなった。＜課題⑧ 看護職が実践している援助が看取りやその人らしい生活を支えることに繋がっているという実感できることが必要である＞では、看護実践の共有や報告する場や実践現場の活用など、多忙な看護職が実践の振り返りを積み重ねるための工夫が必要であると考えます。

3. 介護職との協働に向けた介護職支援の充実

特養の入所者の生活を支えるには、介護職との連携が欠かすことができない。しかし、【介護職と話し合う余裕がない現状がある】や【介護職が対応できるように理由とともに説明する必要がある】など、介護職との連携が援助に活かされていないことが考えられた。二木（2010）は、「介護職が十分力を発揮し質の高いケアを提供するために、介護職の不安を取り去り安心して挑戦できるバックアップが看護職の重要な業務であることが示唆された」と述べており、＜課題⑨ 介護職との協働に向けた関わりが必要である＞では、入所者と常に関わっている介護職の援助への思いや提案などを自由に話し合える環境を整えることや、介護職が理解し実践できるような説明を心がけるなど協働に向けて取り組む必要があると考えます。

4. ターミナル期の入所者への援助の充実

ターミナル期の関わりでは、【看護職や他職種、家族の皆で看取りの援助を充実させたいという思い】や【看取り期の入所者への関わりができていなかったり心配なことがある】が明らかになった。＜課題⑩ ターミナル期にある入所者の状態に合わせた援助を行うことが必要である＞では、入所者や家族の望む最期に向けて他職種と協働する必要がある。また、小林ら（2016）は、「看護職員は高齢者の死亡に向かう過程における心身の変化について知識を深め、現状の状態把握と将来予測のアセスメント力を身に着ける必要がある」と述べているように、看護職の実践能力の向上に向けて、学習会の実施や日々の実践における経験を共有できる機会を設けることが必要になると考える。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は令和3年度岐阜県立看護大学大学院看護学研究科博士論文の一部を加筆・修正したものである。

なお、本研究に関連する利益相反事項はない。

文献

二木はま子．（2010）． 特別養護老人ホームにおける介護職との連携・協働を円滑にする看護職の認識と行動． 飯田女子短期大学紀要，27，41-55.

- 堀田将士，古川直美，星野純子ほか．(2016)．特別養護老人ホームに勤務する看護職に対する人材育成の現状と課題．岐阜県立看護大学紀要，16(1)，121-127．
- 加藤基子，丹治優子，廣田玲子．(2006)．介護保険施設における看護職員の看護活動と看護に対する認識．老年看護学，10(2)，92-102．
- Kitwood, Tom. (1997/2017)．高橋誠一（訳），認知症のパーソンセンタードケア 新しいケアの文化へ（初版）(pp. 19-20)．クリエイツかもがわ．
- 小林尚司，山下香枝子．(2016)．特別養護老人ホームの看取りケアにおける看護職員の実践．せいい看護学会誌，6(2)，9-15．
- 厚生労働省政策統括官．(2018)．平成28年介護サービス施設・事業所調査 (p. 85)．厚生労働統計協会．
- 厚生労働省政策統括官．(2022)．令和2年介護サービス施設・事業所調査 (p. 59)．厚生労働統計協会．
- 厚生労働統計協会．(2021)．国民衛生の動向・厚生指標 増刊，68(9)．厚生労働統計協会．
- 黒田寿美恵，船橋眞子，中垣和子．(2017)．看護学分野における『その人らしさ』の概念分析 Rodgers の概念分析法を用いて．日本看護研究学会雑誌，40(2)，141-150．
- 寺尾洋介，高橋良幸，正木治恵ほか．(2014)．特別養護老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるものー最後まで通い続ける家族を対象にー．千葉看護学会会誌，20(1)，47-54．

(受稿日 令和4年8月25日)

(採用日 令和5年1月23日)

Clarifying the Issues in the Nursing Practice to Support the Individual Lives of Residents in Nursing Homes

Masashi Hotta

Nursing of Adults, Gifu College of Nursing

Abstract

This study aimed to clarify nursing practice issues that support the individual lives of nursing home residents. Furthermore, it examines the direction of problem-solving and obtaining suggestions for nursing to support the lives of residents.

Nurses, residents, and family members of the residents were interviewed. In addition, nurses from other facilities were interviewed. A questionnaire survey of other professionals at nursing homes was administered concerning the current state of nursing practice that supports the residents' personal lives. The nursing home manager, nurses, and the author discussed the results and clarified the current situation and issues.

Nurses in nursing homes reported that "the current situation makes it difficult to provide resident-centered support." They felt that "difficulty in communication between nurses," and "no opportunity to reflect deeply on their involvement with residents" were ongoing problems. In addition, we have gained insights into the support provided to residents of other occupations, as well as the perspectives of other occupations toward nurses, the views of residents and their families on life at the facility and its staff, and the current situation and issues facing nursing practice at other facilities. The following issues were clarified *"Because I cannot make the most of the situations I am involved in as a nurse, I cannot talk enough with the residents and wait for their words, so I need to listen carefully to what the residents have to say"; "Nurses need to be involved so that they can help families who find it difficult to get involved with residents"; "It is necessary to have detailed discussions among nurses, reconfirm the role of nurses, and have a common understanding of nursing practice"; "We need to support caregivers in order to work with caregivers"; "It is necessary to provide assistance according to the conditions of the residents during the terminal period"; and so on.*

Nursing practice problem-solving that supports the individual lives of residents in nursing homes should *"be conscious of understanding the thoughts of residents in daily interactions"* and *"assist families in understanding the feelings of residents."* In addition, learning opportunities, time to reflect on daily practice, and explanations that care workers can understand should be provided.

Key words: nursing home, residents' individual lives, nursing practice, cooperation